＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter

[No.5　2008/2/25]

----

gCOE 事務局からのお知らせ
オトゥール博士の講演について
gCOE 事業推進担当者による海外連携事業について
「テクスト布置解釈学原論」講義科目）の要約
第 5 回オープンレクチャーの要約
第 3 回国際シンポジウム概要
グローバル COE 研究教育員ブリーフィング要約

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ gCOE 事務局からのお知らせ

－ －

グローバル COE 論文賞への応募ありがとうございました.
受賞者の発表については，グローバル COE 論文賞選考委員会
が 応募論文を審査した上で，3 月 5 日をめどに受賞
者に通知するとともに Web で発表します.
また，グローバル COE 論文賞の授賞式を次の日程で開催します.
当日は授賞式の後，次年度のグローバル COE の活動内容や公募事
業についての説明会も行います. 皆さんの参加をお待ちしています.

日時 :2008 年 4 月 9 日 水）15 時 45 分～
場所 :文学部講義棟 237 室

■ オトゥール博士の講演について

－ －

前回のニューズレターでご紹介した招聘研究者のオトゥール博士の第 4
回講演が下記にて行なわれます。

2008 年 2 月 27 日 水）16:30-18:00
文学部 ·文学研究科 128 室
題目 ADVERTISING: WORDS AND IMAGES

Picasso and Cannon Copiers
使用言語 :英語

■ gCOE 事業推進担当者による海外連携事業について

グローバル COE 執行部の釘貫亨教授（教育担当サブリーダー）と重見晋也准教授（技術統括責任者）が去る1 月 24 日～29 日にフランス・プロヴァンス大学人文科学センターを訪問し、本プロジェクトとの学術および教育上の連携と交流について同機関の関係者と協議を行いました。また、これに際して釘貫教授は同大学の博士論文審査の依頼を受け、現代日本語の助詞「て」に関するYuki TAKEI 氏の学位論文 "Analyse morphologique et syntaxique de la particule TE en japonais contemporain" について、1 月 25 日 14 時～17 時に行われた公開論文審査にて、Christian TOURATIER 氏（指導教授）、Andre DELTEIL 氏、Maurice COYAUD 氏とともに口述審査を担当しました。

■ 「テクスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

11 月 7 日担当（釘貫亨教授（日本語学））

慶応 2年（1866）、徳川幕府の官僚である前島密が将軍徳川慶喜に建白した「漢字御廃止之儀」は、極めてラジカルな国字改革として知られる。この改革案が結果的に実現しなかった原因は、様々に考えられるが、その大きな要因として、当時の庶民の漢字を巡るリテラシーの高さが障害となったことは確実である。幕府や各藩が百姓、町人の教育に責任を持ったことはないが、寺子屋などの民間の教育機関が庶民教育を担った。本来、支配者の専有物であった文字とりわけ漢字の民衆への下降は、鎌倉時代に仏教僧侶を媒介にして始まり、近世期には大衆的出版物が漢字情報を民衆に普及する役割を果たした。当時の大衆的な読み物に使われる漢字には、出版書肆の配慮で音訓にわたる極めて懇切な振り仮名が施されており、これが教育的効果を持ったことが容易に想像される。近世期には商業活動や農業経営において文書決裁が常態化しており、これに従事する農民や商人にとって文字処理能力は必須の要諦で

あった。寺子屋の普及は、このような社会的要求に応えたものであった。幕末には、人力車夫や大家に奉公する少女が労働の合間に書物を読みふける光景が複数の西洋の外交官によって驚きを以て報告されており、幕末当時の日本の書記生活は、漢字なしに成り立たなくなっていた。漢字は日本人にとって難解な外国文字であるが、長年にわたる学習の結果、抽象的概念をこれによって表示する習慣が身についており、明治維新以後の近代化過程の中で西洋の制度、思想、技術にかかるあらゆる概念を漢語訳によって乗り切ったことは、世界の近代化過程の中で特筆すべき出来事である。

11 月 21 日担当　和崎春日教授　比較人文学）

　テクストを読み取ること」を、時間軸をいれて　読み取れる意味の変化」として捉えていく動態的な意味の読み取り方法論を提案する。まず、日本で社会化・文化化された私が、そこの価値基準を知らないアフリカを始めて訪れ、徐々にその生活様式に慣れていく変化を、　テクスト動態」として取り扱う。このテーマを設定することによって、刻々と変わっていくテクスト間の布置関係が動態的に把握できるからである。
異文化に住み始めた文化人類学者は、初めのうち、自分が慣れ親しんだコンテクスト－テクスト関係による意味の読み取りを試みるしかない。そこのコンテクストもテクストもまったくわからない。言葉の一つ一つを獲得していき、ある物ある事の意味を教わると、生活事象全般の意味が一つ一つ明らかになっていき、自分が知りたい事象の意味　たとえばある儀礼の意味）の一端が見えてくる。この間、何回もの読み間違いと齟齬と誤解　相互の）とタブー侵犯をおこなう。周りの事象の意味が一つずつわかると、ある対象とする特定事象の意味も段階的にわかってくる。その事象が見えてくると、周りの意味も以前とはまったく違うものに見えてくる。これを、何度も何度も、毎日毎日繰り返す。
こうして、単なる静態的なテクスト変換の布置ではなく、このように時間軸をいれて刻々とフェーズを変える　複数テクスト遷移モデル」が人々の行為や物事の　読み取り」には、枢要であることを提案する。しかも、このモデルは、コンテクストとテクストの地位逆転可能性を包摂したモデルである。つまり、生活にある物事の意味は、主役になって注目され意味を読み取られるが、逆にそれが脇役になって他の事象の意味を規定する。こうして、　コンテクスト－テクストの相互変換性」を包

摂した 複数テクスト遷移モデル」の有効性を提案したのである。

12 月 5 日担当　クレール・フォヴェルグ外国人教師　フランス文学）
　ライプニッツとディドロにおける記号論の問題」

17 世紀と18 世紀にロックやライプニッツやディドロなどの著作者によって定義されてきた記号論は、言語記号以前の記号の概念に属し、その様々な特徴は参照するに値する。と言うのも、記号論の問題は解釈の観念に関係するからだ。ライプニッツによると、記号論は人間の持っている秩序と技術の認識と発明の能力に係わり、外界に意味を与える能力に係わるものである。
ところで、我々は外界の秩序は直ちに感知できず、現象の理解は現れてくる現象に我々が与える秩序、つまり知覚が与える秩序に依拠している。従って、知覚は記号論にモデルを提供することになる。というのも、知覚そのものは感性で捉えうる性質と抽象的な概念を混合しているからである。この点においては、他の点で意を異にする著者であるライプニッツとディドロが一致を見る。どの感覚器官にもタブラ(tabula、ラテン語)が備わっており、そのタブラによって諸感覚と言語以前の記号を組み合わせられるのだ。
かくして記号論は、当初同一視されていた論理学とは区別され、ライプニッツによって発明の技術として定義されて、更に 百科全書』の計画において最適な応用がなされる。なぜなら、18 世紀にディドロとダランベールが編集した 百科全書』は、発明と発見の偶然的な秩序に従って科学と技術の歴史を記述するだけでなく、むしろ記録される様々な知識の秩序自体が発明の方法を示すように企図しているからだ。言い換えれば、発明の技術を知るには発見の歴史は役に立たないのであって、結局、実際に科学的であり、百科全書に適切な秩序を定めるためには記号論が必要になる。なぜなら、百科全書派が構想した記号論は、現象の秩序と知覚の秩序の関係が、自明ではなく絶えず確証される必要のある複数の類似に基づいた関係であると認識させてくれるからである。

■第 5 回オープンレクチャーの要約

2008 年 2 月 20 日 水）18 時～19 時
ローレンス・マイケル・オトゥール 博士 マードック大学
オーストラリア）名誉教授）
題目 MULTIMODALITY: ENGAGING WITH PAINTING
Botticelli - Canaletto - Rembrandt - Seurat

この講演では、ハリデーの体系・機能文法に端を発する記号論的分析を用いて絵画の構造分析を、いくつかの作品を実例として実際に行った。絵画分析のために用いられる機能は、描写対象を示す表示機能 representational function）、見る者を魅了する引き付け機能 engagement function）、構図を表す構成機能 compositional function）の三つである。この三つの機能を具体的に考察するために、それぞれの機能を顕著に示している作品として、カナレット、レンブラント、スーラの代表的な作品をそれぞれ取り上げ、上記の機能を検証しながら絵画の分析を試みた。しかし、絵画はこれら三つの機能のどれか一つだけから成り立っているわけではない。どの絵画にもこれらの三つの機能を読み取ることは可能である。そこで、三つの機能全てを効果的に活用している具体的な作品としてボッティチェリの 春』を取り上げて考察し、作品における各機能を検証した。また、言語テクストの場合と同様に、絵画のような非言語テクストにも、それを構成する大から小に至る階層的な単位 unit）があり、その意味でも絵画を一種のテクストと見なす妥当性が示された。

■ gCOE 第 3 回国際シンポジウム概要

2008 年 2 月 9 日 土）～10 日 日）
テクスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る』
‘Identity in Text Interpretation and Everyday Life ”
名古屋大学文学部 文学研究科 237 室にて開催。

相互作用と社会構造の間の関係が少なくとも50 年にわたって社会理論家の関心を集めてきた一方で、社会を指向する言語学者も近年そのような繋がりを特に活発に探求してきている。このような問題を追及する一般的動機は、しばしば我々の日々の生活の一部を成す問題を理解しようとすることに関係している。この国際研究集会が焦点を置くのは、

我々の日々の暮らしの一側面、即ち自己同一性を社会的・文化的・言語的相違として扱い生み出すテクストの状況に応じた解釈である。その中で、このようなテクストの状況内での創出と解釈―非常に大まかに言えば、それらのテクストの音声的・書記的・聴覚的・視覚的組み合わせと定義される―が如何に社会歴史的テクストとより局所的に作り出されたテクストの両方に依拠しているかの探求を試みることであった。
この国際研究集会では、『テクスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る』をテーマとし、海外からDr. Michael O'Toole(Murdoch University)、Dr. Kay O'Halloran (National University of Singapore)、Dr. Shigeru Miyagawa (Massachusetts Institute of Technology)をはじめとする先駆的研究者を迎え、国内から8件、海外から4件の研究発表が行われた。映像やインターネット、音声ファイル等を駆使した発表を含め、我々の日々の暮らしの中にあるテクストと状況に応じた解釈についての研究には、国内外から多くの参加者が集まり、熱心な議論が展開された。

■ gCOE研究教育員ブリーフィング要約

品川大輔「シェン（Bantu G40E）の言語構造的特性の記述：グランドデザインとしてのテクスト学的枠組みにおける位置づけ」

本ブリーフィングでは，ケニアの首都ナイロビにおいて遅くとも1970年代からその使用が認められ，現在広範に話者を獲得している広義の混合言語（mixed language）コードであるシェン（Sheng）を対象とした研究について，テクスト解釈学的な視点からの全体的な枠組みを提示し，その射程内での同コードの構造記述研究が占める位置づけを明示することを第一の目的とした．また，進行中の研究課題の紹介として，シェンの形態統語論レベルでのトピック，とくにその関係節（relative clause）表示に見られる形式的制約（structural constraint）の問題を取り上げて，概略的に論じた．混合言語一般の成立過程においては，その文法的規則の簡略化（simplification），語構造の孤立/分析化（isolation/analyzation）の2つのプロセスの重要性が従来指摘されている．しかしながら，いくつかのシェンの書記テクストをデータとした分析からは，そのバイアスからは逸脱するような現象を見出すことができる．

ごく簡単な例を示せば，内陸スワヒリ語における関係節表示の最も分析的な（analytic）方法（スワヒリ語学で言う“amba-(AG)”（“relative”）は対象としたテクスト内では一例も現れず，代替的に“(AG)-enye”（～を持った）という所有関係詞の純粋関係詞としての使用が顕著であるという現象が認められる．こういった現象から，単なる簡略化，分析化という一般的傾向を制約する力としての（構造的パターン（prefix-stem 構造）の維持（或いは広義の structural leveling）」というベクトルが，むしろ優先的に作用していることを示唆する．以上のような視点，さらには現地民族語からの文法レベルの影響を重視しつつ，細部にわたる構造記述を積み重ねていくことで，シェンが有する/ことになるであろう形式的混質性（hybridity）の解明を試みる．

金銀珠　日本語における主格助詞「の」の歴史的展開」

日本語テクスト構文内に現れる主格助詞「の」の歴史的展開の様子とその言語内的要因を解明することを目的とし，そのために必要な研究課題を整理した。それには通時的観点から，「の」が現れる全体的な句の特徴なり差なりを総体的に観察し，その有機的関連性を把握すること，「が」が用いられる例との総体的な比較が必要であること，現代語の連体修飾節における主格助詞「の」が用いられる理由を歴史的観点から解明すること，の三点の考察が必要であるとした。このような将来的展望を提示した後，特に最後に挙げた現代語の連体修飾節において「の」が主格助詞として現れる理由について考察した。現代語の連体修飾節においては「髪の長い女」「髪が長い女」のように主語を表示する「の」「が」の 2 種類の助詞が使用される。現代語の一般的な主語表示は「が」が担当するが，連体節に限っては「の」で主語を表示することができる。現代語においてこのような「の」が現れるのはなぜかについて，中古語における主語を表示する助詞「の」が現れる構文を意味役割分担という観点から考察し，現代語の連体節において「の」が現れる構文の意味的構文的特徴と比較した。その結果，現代語の連体節における助詞「の」は中古語における準体法の役割を担ってきている可能性がある，というのが現段階で発表者が到達した一応の見通しである。ただし，これは歴史的な検証を経なければならない問題であり，細部の検証は行われていない。今後の課題とした。

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2008 年 3 月中旬
を予定しています。

GCOE テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.5
発行 :GCOE 編集部
編集担当 :鎌田隆行
Copyright(C) 2008 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS